

特集 萎縮型加齢黄斑変性の現状**序 論**

門之園一明*

萎縮型加齢黄斑変性治療の新時代

今月の『眼科』の特集では、萎縮型加齢黄斑変性を取り上げています。本疾患は、現在、全世界で最も注目されている黄斑疾患です。その大きな理由のひとつに、これまで有効な治療がないとされていたにもかかわらず、複数の新規治療薬が2023年より新薬として承認されたことが挙げられます。そのひとつは、商品名を Syfovre® (サイフォベア) として米国で Apellis 社から市販されています。

萎縮型加齢黄斑変性の誤解

一方、萎縮型加齢黄斑変性への日本での関心は高くはありません。これは、本疾患がアジア特に日本で希少であるというこれまでの誤った理解によると言わざるを得ません。実際、日本での萎縮型加齢黄斑変性は後期加齢黄斑変性の5%に満たないといわれています。また、疾患の診断も医師によりまちまちで、萎縮型加齢黄斑変性という病気の理解が浸透していないことも大きな問題といえます。たとえば、黄斑ジストロフィを誤って萎縮型と誤診することさえあり得ます。全世界の人口の半数以上がアジアであり、この人口ボリュームゾーンを考えると、今後ますます日本人を含めたアジア人の萎縮型加齢黄斑変性患者の増加が危ぶまれます。

萎縮型加齢黄斑変性の病態研究の魅力

本疾患の病態生理の解明は複雑多岐にわたっています。ゲノム医学や免疫学の成果で補体が本疾患に大きく関与することが示唆されています。特に補体 H 遺伝子の異常が Bruch 膜への脂質の異常蓄積や色素上皮の形質転換、網膜外層障害をもたらすといわれています。結果的にこのような基礎医学の成果が今日の創薬につながっているわけですが、必ずしもあたらしい薬が視機能を向上させるわけでもなさそうです。萎縮型加齢黄斑変性は、研究分野として未完成の魅力的な分野であり、多くの基礎、臨床研究者の研究心をくすぐり続ける分野であることに変わりはありません。いずれこの分野のスターが本邦から登場する日を期待しています。日本人研究者の得意とする分野と思います。

超豪華な執筆陣

本特集は、この分野の名実ともにプロに執筆を依頼しています。網膜学の奥行きの高さ、久しぶりに日本の基礎科学力の高さを実感できる内容になっています。これからはばらばらは、萎縮型加齢黄斑変性の時代が続くと思います。本特集が、萎縮型加齢黄斑変性学の幕開けの記念になるものと確信します。

*Kazuaki Kadonosono 横浜市立大学視覚再生外科